

第1回釧根地域将来像検討委員会

委員意見概要

石橋委員

後継者不足の中で、人口減少という問題は農業も避けて通れない。全国からの就農希望者をいかにして呼び込むかが課題である。

後継者を確保できない場合は、法人化などで生産を維持できるシステムを作っていく必要がある。

釧根地域の酪農の戦略として、本州の需要に応えられる生産・輸送のシステムを作っていく必要がある。

環境を重視した農業生産は、観光資源にもなる。

釧根地域の農業は、酪農でしか生きられないが、環境問題、消費者の安全・安心に対する意識の問題ということも含めれば、日本で唯一残れる酪農地帯と考えている。

宮田委員

観光、物流など地域の経済と基本的な道路のインフラが結びついた釧路、根室管内を含めた地域のランドデザインを作る必要がある。

高速道路ができた後での情報提供も含めて（ランドデザインが）必要になってくるのではないかと。

海外からの、特に台湾などからの観光客が増えており、またファームステイやアウトドアなどの個別的な要望が増えていく中で、海外からの旅行者や個別旅行に対する情報提供を釧路、根室で整えていけないだろうか。

観光の裾野であるサービス業が北海道の中でも釧路は低いと、サービス業をつくっていく上でも、基盤をつくってビジネスをつくっていくということが必要ではないかと。

情報インフラや先進的なアイデアなど、釧根地域の各地域が持つ強みを連携して、ユビキタスを利用したシステムの中で何かができるというようなビジネス基盤をつくるのが次のステップに必要なと感じた。

大島委員

北海道を取り巻く道州制にからむ問題の議論がまずある。

釧根地域の将来については、域内、域外を含めた地域構造を推計すれば、どのような人口で、どのようなペイラインになるかということは分かってくる。

どこにどれだけ人口を配置して、インフラとしての道路のネットワークやITのネットワークについてコストのかからない地域構造にしていくのかという選択と集中というような視点が必要である。

人口の減少と共に経済、社会的な数字をどう落とし込んでいくのかというターゲットを立てて、それに対してどのように対応していけばよいのかという観点で資料整理をしていくのがいいのではないかと。

栗林委員

釧根地域をベースに如何に生きていくか、存在意義を高めていくか、そこにいる価値を高めていくかということを考えると、それは北海道ベースではなく、对本州であり、対東アジアであり、海外に釧根地域を売っていくことが、あるべき姿であろう。

道東地域のものを海外に出荷するときに、外航コンテナ船が最も簡単な方法であり、コンテナを早く荷役する、あるいはどんなに遅く来ても荷役していくということを追求しているが、外国からはもっと早く、もっと便数が多く、活きのいいものを届けることができるようにすることを要求されている。今の状態ではまだまだ応えられない。

社会資本整備と関わってくるときに、あらためて海外から釧根地域に求められるものが多いことを伝えたい。

近藤委員

経営でいうところの、既に起こりつつある未来への対応、既に人口が減少し、人が住まなくなるといふ地域があることが見えていることに対して地域としてグラウンドデザインをつくってどのように対応していくかということが、この地域でやらなければならないことだ。

漁業体の経営者の高齢化あるいは後継者不足で、その生産現場が疲弊している。このことに釧根地域で対応していかなければならないのではないか。

この地域は非常に食料自給率が高く180%もあるが、外に食料を出してお金を稼いできているということは、何らかの輸送手段を使って外に品物を出していかなければならない。しかし、そのための物流インフラが貧弱である。この状況を改善していかないと、将来にわたって域外からお金を持ってくるということは、難しいのではないか。

海外の旅行者が非常に増えている中で、国際化へ対応したインフラ整備も非常に重要である。標識も英語、日本語、韓国語、中国語で標記するなど、多国語表示して、国際化に対応していくということもこれからは必要になってくるのではないか。

三膳委員

浜中町は酪農と漁業とに分かれているが、観光がどれだけ自分たちに波及しているか、地域づくりという観点では、酪農はどんどん温度が高くなっているが、漁業の方はちょっと温度が低いと感じている。

環境に重点を置き、湿原を守っていきながら、観光や地域づくりを行っている。自分達で今生活しているものが観光客に喜んでいただけるということは、まだまだ生産者たちが十分にわかっていないと思う。自分達はエコツーリズムというところを重点的に活動している。

辻中委員

この釧根では、マストツアーを収容できる大きなところ、エコツアーへ重点をおいていくところと、それぞれの地域、まちが一番得意なところに集中して観光をすすめていく必要があるだろう。

エコツアーを考えると移動で2時間圏内であり、道東での観光には道路の整備が大切で

ある。釧路を拠点にしているお客さんが、知床の羅臼でオオワシを見て、それから雪の中を歩いて、また釧路へ戻ってくるというようなツアーは現状ではできない。釧路から根室や知床へのルート、道路というものの定時性、高速性が必要になってくる。

地元でなければ見られないというところをエコツアー等でプログラムをつくりだしていくことが、地域でなされなければならない。

町民でも地元のきれいな景色を知っている人がほとんどいないという状況にあるので、自分達のまちの人にまず知ってもらい、そしてまちの人が観光客に情報提供できるようになることが必要だ。それから、近隣でお互いに情報提供できるような連携の力を蓄えていくべきだ。

出村委員

農業というのは食料生産という最も基本的な経済活動をしているが、それ以外に国土保全機能、アメニティー機能など色々な外部効果を発揮している。代表的なものに、農業をやることによって、周りの自然環境、景観を美しく保つことがある。北海道では美瑛、富良野などで十分に観光資源になっている。

農業の出す環境に対する負荷をどう抑えていったらよいか。地域の基幹産業である酪農を推奨していくためには汚染問題を何とかしていかなければならない。

グリーンツーリズム、エコツーリズムがもっと活発になっていくと、農業の汚染問題と、観光振興をどのように調和させるか、その仕組みが必要になる。

農家にとっては、ふん尿関係に関する投資は所得を生まない過重な投資となっている。農業由来の汚染問題を解決し、なおかつ観光と調和させるためには、派手な投資ではないが、非常に重要な投資になる。

酪農による水汚染、土壌汚染というのは、単に酪農だけではなくて、漁業資源にも影響する。農業問題と観光問題をそういう面からどう調和していくのか。

観光客にあるいは地元の人に地元の美味しい食材を食べてもらうことが観光の基本だと思う。資源はここにたくさんあるので、それをどう組み合わせていくのかということが、重要になる。

人口は確かに活動力の基盤であるが、人口が減るということをあまり大変だと言う必要はない。極端なことを言えば、今まで50坪にしか住めなかったけれども、100坪の住宅に住めるようになるということになる。

行木委員

人口が少ない過疎地、医療でいえば医療過疎地は、平たく言ってしまえば人材の過疎地ではないか。人がいないのは数ではなくて、あるレベルの人がいなくなっているということではないか。

まちおこしは、人が減っていく、まちが減っていく、商店が減っていくといった最終的な状況（地獄絵図）を踏まえて、先進事例をモデルにしながら考えることが重要。

全国的に国立公園がいくつかあるうちの3つがこの圏内にある。ここの人口は減っていくかもしれないけれども、国立公園全体が一体とした地域であるということに寄与した観光、そこに根付けるような産業をつくっていく以外に、長期的にはないのではないか。国際性ということでは、ある意味では言葉の問題が非常に大きく、学校教育でも例えば

簡単なロシア語、韓国語、中国語などの挨拶、道案内が使えるというような言葉体験を、教育段階で体験できるような工夫があってもいいのではないかと。

医療と、介護の時代だが、医療・介護はあまり産業としては評価されていない。医療や介護は立派な産業であり、しかも生活密着型で暮らしに直結しているし、需要もある。産業で言えば成長だと思える。

石橋委員

ふん尿処理の問題がありましたけれども、法律ができて当たり前のことになった。現在では、ふん尿の臭気を出さないような処理の仕方が求められており、奨励施策が出てきた。

これは、地域の中で産業として生き残っていくための課題であり、対応していかなければ将来的に酪農が残っていけない問題だと受け止めて、今努力している。

辻中委員

エコツーリズムは地域の総合力である。景色がいいだけではだめで、そこに住んでいる人、仕事をしている人、それから産業文化を全部含めて、そのまちの力を見てもらうのが、エコツーリズムである。

インフラ整備の関係で、環境保護、保全そして景観を絶対はずしてはいけない。釧路、根室というのは自然との共生、共存する場だということですからすすめていけば、明るくなるのではないかと。

小磯委員長

持続可能な開発がキーワードになる。この言葉は色々なところで語られているが、言葉が先行していて、実践はこれからの課題である。

釧路地域において、子供、孫の世代に自分達と同じような豊かな生活を引き継いでいく、そのために今どういう地域づくりをすればいいのか、そのための基盤整備はどうあるかということが求められている。

人口減少という少なくとも経験したことがないような時代における持続可能な開発の新しい地域のモデルが、この地域の中でどういう分野で、どういう取り組みの中で展開していけるか、どういうテーマがあるのか、ということについて今日各委員からいくつか提示された。

農業、観光、環境であれ、あるいは国際化時代に新しい産業展開をしていくという、それぞれの取り組みがやはり色々なかたちで連携し、そうすることによって地域の持続可能な開発というものを旨とした一つのモデルになりうる。

難しい課題ではあるが、その具体策について、一つでも二つでも、具体的なものを出せるようなかたちで委員会を進めていきたい。